

# 多摩川に秋を感じて

文人の  
武蔵野

武蔵国江戸に生まれた夏目漱石は、武蔵野出身の江戸っ子でした。明治の東京に生まれ、漱石に小説を激賞されて世に出た芥川龍之介(1892-1927年)は、みずから「東京の子」を名乗りました。東京市京橋区の牧場主の家に生まれた芥川は、家庭の事情により西国の大川端(吾妻橋から先の隅田川の下流域)で養育されます。そして「大川の水の色」は「我愛する『東京』の色であり」と記

## 芥川龍之介 ①



芥川龍之介(国立国会図書館デジタルコレクションより)

します。謡曲「隅田川」や「伊勢物語」を引き合いに出して、広く武蔵野のなかに大川端のあることを念頭に置きながらも、「武蔵野の昔」とは区別する形で故郷としての東京を見だしています。

1910年(明治43年)、18歳で現在の新宿2丁目にあった牧場脇の家に転居した芥川は、田端に越すまでの4年間で新宿で過ごします。芥川が彼にとつての武蔵野に出会っ

たのもその頃でした。国木田独歩の「武蔵野」を読んで以来、毎年秋になると「何度となく」「日野 立川 豊田——玉川の沿岸の村々」を訪れ武蔵野に遊んでいることを友人宛ての手紙に記したため、「秋の歌」を添えています。芥川が武蔵野の秋を感じるのは、玉川(多摩川)の沿岸でした。

「文芸的な、余りに文芸的な」(1927年)は、谷崎潤一郎との論争の形をとりながら「詩的精神」に基づく芥川晩年の芸術意識を表明した作品ですが、そこでも芥川は、独歩とその短編小説を評価し、小品「武蔵野」にも斬新さを認めています。

芥川は、独歩を通じて武蔵野を解し、川の水を介して現実の武蔵野を探索し、武蔵野を愛した東京人でした。

(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

### おすすめの1冊

#### 「文芸的な、余りに文芸的な」饒舌録ほか

1927年(昭和2年)、総合雑誌「改造」誌上では、芥川龍之介と谷崎潤一郎が、お互いの文学観を確かめ合い高め合うように小説論議を繰り広げていました。「文芸的な、余りに文芸的な」の最終回の原稿を書き上げた直後の7月24日、芥川は谷崎の誕生日に自殺します。文学史に残る議論の全体像がわかるように編集された必読の一冊です。



(講談社文芸文庫)